

ポスト社会主義国における職業と人生選択： カザフスタンのある朝鮮人の事例より

Occupational and life choice in a postsocialist country: A case study of a Korean in Kazakhstan

風 戸 真 理

キーワード：ソ連（ソビエト連邦）、職業選択、住宅取得、ライフヒストリー、マイノリティー

1. はじめに

本論文は、カザフスタン国籍の朝鮮人男性による職業選択と住宅の取得を中心とする人生の選択に焦点を当てて、社会主義期とポスト社会主義期の労働と生活のあり方およびその理念がどのようなものであったのかを検討するものである。筆者は、旧ソビエト社会主義共和国連邦（以下、ソ連とよぶ）をはじめとする社会主義体制のもとで暮らした人びとの生き方に関心があり、1994年からモンゴル国や旧ソ連の国々で調査研究をおこなってきた。これらの国々では約70年間の社会主義期に、資本主義諸国とは異なる政治・経済・社会システムが作られ、そのなかで人びとは職業を選び、住宅を取得して生活してきた。ところが1991年にソ連が崩壊するとともに、これらの国々では国家の体制が転換し、政治の民主化と経済の市場化への「移行」の過程が始まった。このようなポスト社会主義状況にある国々においては、人びとは社会主義期の経験のうえに、新たな生活を組み立てている [風戸 2009]。

この論文では、最初に、カザフスタン共和国（1991年までカザフ・ソビエト社会主義共和国。以下では、両方ともに「カザフスタン」とよぶ）になぜ朝鮮人が暮らしているのかを説明するために、カザフスタンの朝鮮人の歴史にふれておく。そのうえで、ポスト社会主義社会における職業選択についてのこれまでの研究を紹介する。次に、ひとりの朝鮮人男性のライフヒストリーを分析することをとおして、朝鮮人という少数民族であることが彼の人生にどのようにはたらいたのか、また職業選択は具体的にどのようになされてきたのか、を検討する。最後に、社会主義期とポスト社会主義期の労働と生活のあり方について議論する。

2. カザフスタンの朝鮮人とその職業選択の歴史

まず、先行研究に依拠して、カザフスタンに住む朝鮮人の歴史的背景について述べる。続いて、ソ連における職業選択のあり方とポスト社会主義期の労働をめぐる状況を概観し、そのうえでカザフスタンにおけるポスト社会主義期あるいは独立後の民族と職業との関係を紹介する。

カザフスタンをはじめとする中央アジア諸国には、多くの朝鮮人が暮らしている。彼らは、19世紀半ば以降、朝鮮半島から陸続きのロシア極東地域に移住した人びとの子孫である [半谷 2006：2]。ロシア帝国が1860年にウラジオストクを建設し、免税などの措置をとおしてこの新開拓地への移民を奨励したことから [李 2002：14]、19世紀初頭の極東地域には朝鮮人が集まった。ところが、この人びとはスターリンによって中央アジアへ強制移住させられた。その理由は半谷によれば、スターリン体制下においてソ連極東地域の朝鮮人は、「国境をまたぐ民族の絆」をもち、そして、彼らが極東ソ連国境近くに住んでいるがために、日本人に雇われた朝鮮人スパイが半島部からソ連極東地域に潜入してきているのだという疑いをかけられたことにある [半谷 2006：33]。そして、1937年、極東地域の朝鮮人のほぼ全てにあたる17万2000人が中央アジアに [同上]、そのうち9万5000人がカザフスタンに強制移住させられた [半谷 2006：35]。極東からカザフスタンまでの移動手段は、移住計画に沿って運行された貨物列車で、旅程は1カ月から1カ月半におよぶ長旅であった [李 2002：61-68]。計画全体としては、最初の列車の出発が1937年9月25日で、最後の列車がシベリアのノボシビルスクに着いたのは同年11月15日という短期間での移動であった [同上]。

強制移住に際しては当初、民族語学校も移設されたが、1938年3月の民族語学校改編決定により、移設されたばかりの朝鮮語教育施設はすべて閉鎖された [半谷 2006：36]。これにより公的な母語教育がおこなわれなくなり、朝鮮語を話せない朝鮮人の割合が急増した [同上]。さらに、1950年代には居住地選択に関する制限が撤廃されたことで朝鮮人の多くが都市に移り住み、ロシア語の習得が加速した [李 2002：158]。1979年には朝鮮人は、カザフスタンを構成する諸民族のなかで都市に住む人口の比率がもっとも高い民族となり、その割合は80.4%に達した [岡 1999：29]。李によれば、「ソ連というロシア人中心社会」で、朝鮮人がとくに都市生活を選んだことと、それに加えて、高等教育の機会、職業選択、職場における昇進などとの関係もあり、朝鮮人の言語環境はロシア語中心となっていた [李 2002：158]。

ソ連一般における職業選択についていうと、ソ連では労働者は自由に職場を移動していた¹ [杉本 1994：60-61]。その背景にはソ連の経済体制下での慢性的な過剰雇用があり、労働力は売り手市場となっていたことがある [同上 61-62]。労働者は、高い賃金、住宅の供給、良好な企業付属施設、職業資格の向上、より創造的な仕事などを求めて自発的に退職し、労働市場を経て移動したが、結果としてこれらの希望は達成され、ソ連における退職・転職はプラスをもたらすものであった [同上]。

1991年にソ連が崩壊に向かうと、人びとは政治・経済的な混乱に巻き込まれて困難な状況に

おちいった。ソ連の市場経済化への移行は経済の脱国家化という形で展開し、それともなう経済諸機関の縮小や国営企業の民営化などの過程で解雇による労働力の排出がおこなわれた [杉本 1994: 62-63]。それと同時に、インフレーションが増進するなかで、それに応じて収入が増加しない人びとの転職や追加就業、それに加えてこれまで働いていなかった人びとの就業など、経済的必要に強制された労働力供給と労働力移動が起きた [同上]。この量的不均衡のために多くの失業者が生じたが、とりわけ「専門家」(中等専門学校以上の学歴をもつ者)と女性の失業者の数が多く、彼らが全失業者に占める割合が高かった [同上 74-76]。ソ連は多くの専門家を育成したが、少なくとも1990年代前半には労働力需要の約9割が労働者職に対するものであり、専門家の需要はわずかで、労働力需要には大きな質的不均衡もあった [同上]。これまでに資本によって雇用されていて、そこから解雇された人びとは、靴磨きなどの少ない資本で自営できるインフォーマルセクターに参入したり、門番や雑役人として自分たちの用役を消費者に直接売などの工夫をしてきた [同上 77]。

一方、同年にソ連から独立したカザフスタンは、カザフ人を基幹民族として中心にした国家建設を始めた。1995年のカザフスタン共和国憲法は、カザフ語を国家語とし、国家組織および地方自治組織においてはロシア語がカザフ語と同等に公的に用いられる、と規定している [浅村 2011: 4]。職業の面での変化としては、カザフ人は、社会主義期にも共和国共産党などにおいて優先的に登用されていたが、独立後あるいは体制転換後にはあらゆる国家機関においてその傾向が強まった² [岡 2006: 49-50]。このような公職に占めるカザフ人の割合の増大に対して少数民族は不満をいんでいる [半谷 2006: 3]。

以上をまとめると、カザフスタンの朝鮮人は1937年にスターリンによって極東地域から強制移動させられた人びとであり、彼らはカザフスタンにおいて、民族学校が閉鎖されたことと生活の場に都市を選んだことにより、ロシア語が優先する社会へ急速に同化してきた。職業選択に関しては、ソ連一般についていえば、ソ連では労働市場が売り手市場であり、労働者は賃金とともに住宅供給などの待遇を考慮して自発的に転職していた。体制転換後は、雇用が縮小して失業者が増え、とくに専門家と女性の再就職が困難な状況にある。カザフスタンの場合は、経済体制の転換とともにソ連から独立してカザフ人とカザフ語中心の国づくりを進めてきた。そのため、カザフ人以外の民族から職業選択をめぐる不満が生じている。

では、カザフスタンの少数民族は職業の選択と住宅の確保をめぐる具体的などのような経験をしてきたのだろうか。以下では、カザフスタンに暮らす朝鮮人男性のライフヒストリーをひもときながら、社会主義期とポスト社会主義期の職業選択と住宅取得のあり方を検討する。

3. 調査地・調査方法

カザフスタンは、面積約272万平方kmと広大で、人口は1602万人(2011年現在)と少ない [外務省]。民族別の人口構成は2009年現在、カザフ人が63.1%、ロシア人が23.7%で、その後

に全人口の3%に満たない少数民族としてウズベク人、ウクライナ人、ウイグル人などが続くが、朝鮮人については人口比率第8位の0.6%として、約10万人がカザフスタンに暮らしている〔The Agency of Statistics of the Republic of Kazakhstan 2009:20〕。

筆者は2007年7月17日から9月15日までカザフスタンに滞在し、アルマティ州ウイグル郡クルグズサイ村およびバルタバイ村で牧畜を中心とした生活の概要と多民族の混住状況に関する調査をおこなうとともに、アルマティ市にて9月11日と12日にジェーニャ氏（仮名、当時52歳、男性。以下、敬称略）から彼の職業選択を中心とするライフヒストリーを聞いた。ジェーニャとの会話はロシア語で、彼が運転する自動車のなかと筆者が滞在していたアパートでおこなった。1日目にはジェーニャに自由に話してもらった。2日目にはジェーニャが自身の職歴について妻に確認しながら作ったというメモを持参して、筆者に書き写すように指示し、ジェーニャと筆者はそのメモ見ながら話しを続けた。

4. ジェーニャのライフヒストリー

この章ではジェーニャのライフヒストリーを提示する。以下は、ジェーニャの語りを翻訳、整理し、時間の流れにそって編集したものである。地の文は原則としてジェーニャの語った内容である。彼と筆者の発言（一部抜粋を含める）を直訳した部分にはカギ括弧をつけて直接話法で示した。

1955年、ジェーニャはカザフスタン南部のクジルオルダで生まれた。ジェーニャの父と母は沿海地方で生まれた朝鮮人で、1937年にカザフスタンに移住させられた経験をもつ。2人は、大学や専門学校を卒業した後にクジルオルダに派遣され、そこで結婚した。母は医者だった。父は水道管関係の仕事をしていて、ダムの設置や下水道工事などのあるところに1カ月単位で出かけ、家に戻ると1週間休んでまた出かけていった。家族は1956年頃に「ウシトベ駅」、現在のウシトベ市に引っ越した。当時、この町は鉄道駅の名前でよばれていた。

1959年に妹が生まれた。しかし、ジェーニャが7歳になった1962年、父が亡くなった。このためジェーニャは10歳で働き始めた。夏休みにウシトベの水稲耕作地でアルバイトをして母を助けた。出生証明書をもっていき、10歳以上だと雇ってもらえた。ただし、これは単なるアルバイトで、労働手帳³には記されなかった。

1969年、母の仕事の都合でジェーニャたちはアルマ・アタ（現在のアルマティ）市に引っ越した。アルマ・アタでの最初の3年間、ジェーニャたちは家族で、ダスタク地区にあった父の妹の家に寄宿した。1972年、母が職場からアパートを与えられ、家族でそこに移ることができた。

1973年、ジェーニャは10年制学校を卒業し、「アルマ・アタ住宅コンビナート」に就職した。それと同時に、中等技術学校の夜間部（4年制。中等専門学校のひとつ）に入学し、建築技術

を学んだ。住宅コンビナートには独身寮があり、地方からアルマ・アタに来た独身者には貸与されたが、ジェーニャの場合は母が市内にアパートをもっていたので、母と妹と一緒にアパートで暮らした。

ジェーニャは1974年、徴兵された。モスクワに送られて2年間の兵役についた。そして1976年に満期で除隊してアルマ・アタの家に帰り、住宅コンビナートでの仕事と中等技術学校での学業に復帰した。

それから2年後の1978年、ジェーニャは結婚した。相手はアルマ・アタに住む朝鮮人女性で、国営企業で働いていた。結婚後、2人はそれぞれの職場で働き続け、1979年に娘が生まれた。その翌年、ジェーニャは中等技術学校を卒業した。

住宅コンビナートの仕事は3交代制で、ジェーニャは深夜のシフトに入っていた。仕事は大変だった。住宅コンビナートはカザフスタンのなかでもきわめて大規模な労働組織で、何千人もの労働者をかかえていた。アルマ・アタの古い、社会主義期の建物の大部分は、住宅コンビナートが建設あるいは部品を製造したものである。その一例は窓の鉄格子である⁴。住宅コンビナートが作った鉄格子が今も街のいたるところに見られる。ジェーニャは自動車ですぐ街を走りながら、「これはもと住宅コンビナートの工場です。これは独身寮。この建物の窓の鉄格子は住宅コンビナートが作った。ここは住宅コンビナート付属の福利厚生施設としての競技場だったけど、今は朝鮮人がキリスト教会を建てた」と、街中のそこかしこにある住宅コンビナートの仕事の痕跡にまつわる記憶を語ってくれた。

1981年、ジェーニャは住宅コンビナートからアパートをもらった。住宅コンビナートでは、結婚して家族をもつとアパートが与えられることになっていた。ジェーニャがもらったアパートは、家族が少ないという理由で、1部屋のアパート（1部屋と台所）だった。当時、住宅コンビナートは住宅をもっとも得やすい職場のひとつだった。なぜなら、住宅コンビナートが集合住宅を一棟建てると、そのうちの4戸を国家が住宅コンビナートに与えるしくみになっていた。住宅コンビナートはこれを次々と労働者に分配した。「そんなに若いころからアパートの取得を考えて職業を選んだのですか」と筆者が驚いてたずねると、「人生計画だよ」とジェーニャははっきりと答えた。

アパートをもらったとほぼ同時期に、ジェーニャは住宅コンビナートから「ダーチャ」⁵用の土地購入クーポンをもらった。ジェーニャはこのクーポンを使って、ダーチャ建設のために区画された更地を50ルーブル⁶で購入し、自分で建築資材を買って建物を建てた。建物を建てて整備するのに1000ルーブルかかった。当時の月給は600ルーブルだった。

ジェーニャがアパートとダーチャの土地クーポンを得た1981年、ジェーニャは会社を辞めた。「アパートを得るために住宅コンビナートに就職した。住宅コンビナートで働くために中等技術学校で建築を学んだ」とジェーニャは言う。住宅コンビナートでは仕事がきつかったが、給料が安かった。当時、転職は自由だったし、仕事はいくらでもあった。みな、いろいろな都合

でさまざまな職場を渡り歩いた。

1981年、ジェーニャは住宅コンビナートよりも給料が高い「道路管理局」に転職した。その5年後の1986年、息子が生まれた。そして1989年、もっと給料の高い「タクシー配車会社」に転職した。ジェーニャは言う。「結婚した。食べていくことは必要か。必要だ。子どもが産まれた。食べさせることが必要か。必要だ。子どもが学校に入る。学用品など買いそろえることが必要か。必要だ」。

1991年、ソ連が崩壊した。タクシー配車会社の民営化でジェーニャが得たものを問うと⁷、彼は最初、「何も得なかった」と言った。「働いている組織から何かもらうはずではないですか」と探ると、「アパートしかもらわなかった」と言う。しかし、ジェーニャにとって、所属組織からの資産分配として、このアパートは満足できるものではなかった。というのも、「タクシー配車会社から5000ルーブルのアパートをもらった。4000ルーブルが会社から出たが、1000ルーブルが自己負担の借金とされ、この返済のために毎月30ルーブルを支払った。クレジットだ。しかも、子どもが2人いるのに、得たのは1部屋のアパートだった。これは本来得るべきものが得られず、足りなかったということだ」とジェーニャは不満を語る。筆者はたずねた。「もしも、住宅コンビナートや道路管理局に勤めていたらもっと多くの資産分配を受けられたのでしょうか」。「そうだろう。でもその時々で、よりよい生活を目指して仕事を選んできた」。ジェーニャは、10年制学校卒業後に住宅コンビナートに就職し、その後、道路管理局とタクシー配車会社へ転職した自分の選択を肯定している。

体制転換の混乱のなか、肉が1 kgあたり80ルーブルだった時、タクシー配車会社の月給は300ルーブルだった。収入が足りなかった。それで1991年、タクシー配車をやめ、日本人のビジネスマン、X氏の運転手となった⁸。この頃、ジェーニャは自分の小型車を使った自営「タクシー業」もおこなっていた。タクシー業とは、街から街へ長距離移動する人を運ぶ仕事である。体制転換後のカザフスタンには失業者が多く、そのなかで自動車を手に入れた人がタクシー業に従事している。隣国キルギスタンの首都ビシュケクや中国に、予約を受けた乗客を運び、帰りには現地で乗り手をみつけて運んでくる。

X氏とは1992～3年まで仕事をし、そして1993年に日本人の研究者、Y氏と出会った。ジェーニャは2007年現在もY氏の運転手兼アパート管理人として働いている。ジェーニャは現金が必要になって自分の自動車を売ってしまったが、現在はY氏から自動車を与えられて運転手をしている。それに加えて、Y氏のアパートの管理を任されていて、管理費として毎月250ドルを得ている⁹。

1990年代後半には、子どもたちも成長したので念願の2部屋のアパートを買った。今年(2007年)、娘は28歳になった。彼女はアルマティの外国語大学で朝鮮語を専攻し、いま旅行会社で韓国人と一緒に働いている。朝鮮人の男性と結婚し、子どもも産まれている。この初孫がこの9月に1年生になったことをジェーニャはなによりも喜んでいる。一方、息子は21歳になっ

た。まだ若い。メルセデス・ベンツを持っていてタクシー業をしている。

2007年、52歳になったジェーニャは、これまでに22年間働いた¹⁰。年金受給のための労働期間には、兵役期間も含まれ、22年で十分であるという。ジェーニャは社会主義期に2回転職したが、転職するときに無職の期間が1カ月以上あると、その分が実際に無職である期間よりも労働期間から多く引かれるしくみであったが、ジェーニャは毎回1カ月以内に次の職業に就いたので、転職の間の期間が差し引かれることはなかった。とはいえ、実際に年金が受給できるのは、男性は63歳から、女性は原則として58歳からであり、ジェーニャにとっては11年先である。

ジェーニャは現在の自分自身の状況を「無職」と語る。「誰も年寄りを雇わない。若い人だけ。カザフスタンには無職の人が大勢いる」と言う。アルマティ（アルマ・アタから1993年に改名）には新しい建物が増え、建築業が盛んなように見える。しかし、そこで働いているのはウズベキスタンから来た不法就労の出稼ぎ者であり、カザフスタンの人びとには建築現場での仕事はない。

ジェーニャにとっての目下の問題は、息子が結婚したいと言っていることである。筆者たちの目の前を長い長い車体のハマーに花とリボンを飾った結婚式のパレードが通った。この長いハマーはレンタル代が1時間100ドル¹¹である。結婚式には莫大なお金がかかる。「うちは親戚が多いから結婚式に招くお客が多い。母は4人キョウダイ、父は5人キョウダイ、それぞれに子どもがいる。あわせて何人になる。300~400人だ。10,000ドル~15,000ドルかかる。」ジェーニャが結婚したころは家族と親戚で「自ら餅をついて」料理を用意した。今は朝鮮人もカザフ人もみなロシア人と同じように、レストランで料理を予約して結婚式をするようになって、大金がかかるようになった。2006年、姉の息子の結婚式のために、ジェーニャは自分の別荘を80,000ドルで売った。とてもよく手入れした自慢の畑があった。

ジェーニャにたずねてみた。「息子さんがロシア人と結婚したらどうですか」。ジェーニャは「いやだ」と即答した¹²。「彼は朝鮮語は話せないのですよね」。「話せない。でも自民族と結婚してほしい」。「ジェーニャさんと奥さんとどっちが朝鮮語が上手ですか」。「妻に聞いてみる。（携帯電話で妻に電話をかけ、ロシア語でたずねた）君と私とどっちが朝鮮語が上手だろう」。電話を終えてジェーニャが話してくれた。「今の韓国の言葉なら妻の方が上手。でもこの朝鮮人は北方の、中国の朝鮮人と似た言葉を話す。それならば私の方が上手だ」。妻は韓国人と仕事をする機会があったので、そのときに自分で現代韓国語を勉強したという。

5. 考察

ソ連の社会主義体制のもとで社会が安定していた時期、つまりジェーニャにとって若い頃には、彼は専門学校や職場において自身の経験と能力を向上させつつ、より収入の高い職業へとステップアップしてきた。彼は社会主義期、決して解雇されて失業したことはなかった。そし

て、転職するたびに、1カ月以内に次の職場で働き始めることに成功してきた。

彼の人生計画には、その時々¹³の家族の状況に合わせた住宅の確保が組み込まれていた。職業選択のさいには給料とともに住宅の取得の面で有利な職場が選ばれていた。ただし、供給された住宅の部屋数と家族構成との mismatch など、かならずしもうまくいかない場面があった。

ソ連が崩壊した時、ジェーニヤが働いていた会社が民営化され、ジェーニヤはアパートを分配された。しかし、その分配条件は満足できるものではなかった。また、急激なインフレーションが起きていたなかで、収入が足りなかった。そこでジェーニヤは自発的に会社を退職し、外国人との契約による業務に従事し始めた。

現在、ジェーニヤは日本人研究者の運転手兼アパート管理人として収入を得ている。ジェーニヤは彼との関係を14年間にわたって大切に維持してきた。しかし、彼は自らを「無職」と位置づけている。彼にとって運転手とアパート管理人の仕事は職業ではないのである。彼が考える職業とは、生活に十分な収入条件で、かつ住宅などの福利厚生を保障されながら働くこと¹⁴のようである。体制転換後のカザフスタンにはこのような職業につけない人が多い。

カザフスタンをはじめとするポスト社会主義国には、ジェーニヤのように社会主義期に青年時代をおくり、兵役、専門学校での修学および企業組織での労働をとおしてソビエト社会での一人前の大人になった人びとが大勢いる。ジェーニヤは中等専門学校を卒業した専門家であるが、ソ連期に育成された多数の専門家に対しては、体制転換以降、これを受け入れる雇用がない。ジェーニヤの場合は、年齢が高いこともあって転職が困難な状況にある。

ジェーニヤの語りからは、彼が労働に対する高い価値づけや勤勉さの尊重といったソビエト的な労働理念あるいは生活倫理をもっているがうかがえる。その根底にあるのは、「生きるとは働くこと。食べていくため、食べさせるため」というシンプルな信念である。

職業選択と民族との関係についていえば、ソ連はロシア人が多数を占める社会であった。そのなかで希望する職業に就くためにはロシア語能力が必須であった。ジェーニヤは朝鮮人という少数民族であったが、十分なロシア語運用能力をもっていたため、就職や転職には問題はなかった。これまでの研究でも、カザフスタンの朝鮮人におけるロシア語話者の多さと運用能力の高さが指摘されている [李 2002:158、半谷 2006:49]。一方で、ジェーニヤはカザフスタンで生まれた2世であるにもかかわらず、家族のなかで覚えた朝鮮語を話すことができる。家族構成としても、妻、婿ともに朝鮮人である朝鮮人家族をつくっている。

体制転換後あるいは独立後のカザフスタンはカザフ人中心の社会となった。そして、そのことにより他の民族の人びとにとって生きにくさが生じた。朝鮮人は約60年間かけて高いロシア語能力を身につけてきたのであるが、国家が変わったことで今度はカザフ語が必要とされるようになったのである。カザフ語ができないと参入が難しい部門もあるが¹⁵、ジェーニヤにとっては年齢が高いことの方が職業選択上の大きな阻害要因となっている。ソ連からカザフスタン独立への変化は、朝鮮人にとっては、主要民族がロシア人からカザフ人に変っただけで、自

らの少数民族としての位置づけはあまり変わらないという側面があるといえるだろう。経済的には、体制転換後のカザフスタンには韓国資本が多く入っている。ジェーニャの妻と娘は現代韓国語をあやつり、韓国と関わる仕事をしている。彼女たちは、韓国および韓国語に強い関心をもって自らの職業に結びつけているのである。

6. 結論

カザフスタンを含むソ連は、実質上、ロシア語とロシア人を中心とする社会であった。そして、独立したカザフstanはカザフ人中心の社会として国家建設を進めてきた。ジェーニャは社会主義期とポスト社会主義期をとおしてカザフスタンにおいて民族的マイノリティーであったといえる。

ソ連の体制下では、ジェーニャはロシア語中心の環境において十分なロシア語能力と専門技術を身につけ、民族に関係なくソ連人として主体的に自分の人生を選択してきた。ジェーニャは、より高い賃金に加えてよりスムーズに住宅が得られる職場をめざして自発的に退職し、職場を移動してきた。同時に、ロシア社会への完全な同化を目指すわけではなく、朝鮮人としての言語や家族的なつながりを保持し、両者を併存させてきたことも彼の選択の結果である。

ポスト社会主義期には、経済の脱国家化と市場化への移行の過程で多くの労働者が失業した。彼らはもはや社会主義期のように容易に再就職することはできず、カザフスタンには多くの失業者がいる。ジェーニャも経済的必要に強制されて職場を移動したが、現在の仕事に満足していない。彼は朝鮮人であることよりも、年齢が高いことと専門家であることによって、希望する再就職が果たせないでいると考えられる。一方で、体制転換後のカザフスタンでは韓国との経済交流が盛んになった。ジェーニャの妻と娘は韓国語を積極的に学んで、これを職業に結びつけている。しかし、ジェーニャの場合は、朝鮮人であることは家庭や親族関係といった私的な領域に限定されてきたといえる。

以上により、ジェーニャの事例から、朝鮮人としての立場を超えた、社会主義期およびポスト社会主義期カザフスタンの人びとの一般的な労働と生活のあり方と理念を導くことが可能だろう。社会主義期、やる気のある人にとって転職は容易で、人生にプラスにはたらいだ。職業を選択するうえで、高い給料とともに住宅の得やすさは重要な条件であった。ポスト社会主義期、雇用をめぐる状況は不安定であり、とくに高い年齢と専門性は就業をさまたげる要因となっている。このような状況においてもジェーニャをより多くの収入稼得に向かわせるのは、生きることが、自分が食べていくこと、そして次世代を育むこと、というシンプルだが力強い労働理念なのである。

附記

この調査は、総合地球環境学研究所のプロジェクト「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷」（2006—2011年度）の一環としておこなわれ、窪田順平教授、舟川晋也教授、石田紀郎教授、宇山智彦教授に大変にお世話になりました。ここに記して厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 浅村卓生（2011）「カザフスタンにおける自国語振興政策及び文字改革の理念的側面」『外務省調査月報』2011/No.1、pp.1-24。
- 外務省、カザフスタン共和国 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kazakhstan/data.html>。
- 半谷史郎・岡奈津子著（2006）『中央アジアの朝鮮人、ユーラシア・ブックレット No.93』、企画・編集：ユーラシア研究所・ブックレット編集委員会、東洋書店（p.2-47を半谷が、p.48-63を岡が執筆分担した）。
- 風戸真理（2003）「市場経済へ移行する社会における地方に暮らす人々の適応実践—モンゴル国ドルノト県バヤンドン郡の牧畜制度と教育制度の事例より」『モンゴル研究』21：47-67。
- 風戸真理（2009）『現代モンゴル遊牧民の民族誌—ポスト社会主義を生きる』世界思想社。
- 李愛俐娥（2002）『中央アジア少数民族社会の変貌—カザフスタンの朝鮮人を中心に』昭和堂。
- 岡奈津子（1999）「カザフスタンの人口変動」一橋大学経済研究所中核的拠点形成プロジェクト Discussion Paper No. D98-16、p.1-36。
- 杉本龍紀（1994）「市場経済移行下のロシア労働市場」『経済学研究』44（2）：66-82。
- The Agency of Statistics of the Republic of Kazakhstan（2009）“Results of the 2009 National Population Census of the Republic of Kazakhstan”，Astana.
- The Agency of Statistics of the Republic of Kazakhstan，
<http://www.eng.stat.kz/digital/Labour/Pages/default.aspx>.

註

- 1 ソ連と政治・経済的に近い関係にあったモンゴル人民共和国（現在のモンゴル国）でも、人びとが様々な職場と職種を経験しながら人生をおくってきたことを、筆者はライフヒストリー研究によって示している [風戸 2003]。
- 2 中央アジアの少数民族のなかで比較すると、公務員に占める朝鮮人の割合は相対的に高い [岡 2006：51]。
- 3 労働手帳は旧ソ連とロシア連邦で使われてきた公式の労働記録であり、年金受領資格の根拠となる。手帳は労働者各人が所有し、16歳以上の職歴が記される。
- 4 旧ソ連の集合住宅などのビルディングには、窓ガラスの外側に花などをデザインした鉄格子が取り付けられている。
- 5 ダーチャは別荘を意味するロシア語で、旧ソ連の国々では今も多くの人びとがダーチャをもっている。彼らはそこで、主に夏の数カ月間を過ごし、夏から翌春までに自分の家族が食べるための野菜と果物を育てる。
- 6 ルーブルは旧ソ連およびロシア連邦の通貨単位である。
- 7 旧ソ連の国々では、国家体制の転換にともない企業組織が民営化され、労働者は所属組織の資産を私有財産として分配された。

- 8 ジェーニャの語りによれば、彼は1991年12月25日のソ連崩壊を、タクシー配車会社で在職中に経験し、同年に同職場を離職したことになる。本人作の職歴メモにも、1991年にタクシー配車会社から離職し、同年にX氏と働き始めたことが明記されている。
- 9 2007年のカザフスタンの平均月収は当時の公式レートで428ドルである [The Agency of Statistics of the Republic of Kazakhstan]。
- 10 ジェーニャが住宅コンビナートに就職した1973年からタクシー配車会社を辞めた1991年までの期間の合計は18年間であり、1973年から2007年までは34年であり、なぜ22年間になるのかは不明である。
- 11 カザフスタンでは1993年以降、ルーブルに代わってテンゲが法定通貨となっているが、不動産をはじめとする高額な取引には米ドルが用いられることが多い。
- 12 結婚に関しては、カザフスタンに住む朝鮮人に対しておこなわれたアンケート調査がある。調査は、1996年にカザフスタン朝鮮人協会とカザフスタン科学アカデミー東洋学研究所とが共同でおこない (n = 335)、1999年に李愛俐娥がおこなった (n = 247) ものである。その結果としては、配偶者が朝鮮人である人の割合は1996年に61.5%、1999年には79.0%であり [李 2002 : 202]、また、「配偶者に朝鮮人を希望するか」という質問に対しては1999年に「必ず朝鮮人と結婚したい」人は26.2%で、42.2%が「あまりこだわらない」あるいは「まったくこだわらない」であった [李 2002 : 215]。アンケート調査の結果からは、1990年代後半に限って言えば、カザフスタンの朝鮮人が自民族と結婚している割合は増えている。一方、未婚の若者のあいだでは将来の結婚相手を自民族に限定しない人が多いが、同時に、この種の質問は答えにくい問題でもあることがうかがえる。
- 13 注7で言及したアンケートには職業選択に関する項目がある。李によれば、「朝鮮人であることを理由に生活上の被害を受けたことがあるか」という質問に対して、1999年の調査で全体の30%以上が「ある」と答えていて、その被害の内容は、1996年の調査では昇進が第1位で50.7%、就職が第2位で24.8%、1999年の調査では就職が第1位で43.3%、昇進が第3位で10.4%である [李 2002 : 208]。被害の内容としては他に、教育と財産形成がある [同上]。